

2025年4月6日大齋節第5主日

イザヤ書43章16-21節

フィリピの信徒への手紙3章4b-14節

ヨハネによる福音書12章1-8節

新しい聖書日課を用いるようになり、本日大齋節第5主日の福音書がルカ福音書からヨハネ福音書になりました。ベタニアでイエス様が香油を注がれるお話です。このお話自体は、マタイ（26：6-13）とマルコ（14：3-9）にもあり、場面設定や詳細は異なります。ただし、ヨハネ福音書のお話は、共観福音書と全体構成がかなり異なり、マルタとマリア、そしてラザロが登場します。また、イスカリオテのユダも登場します。

福音書物語の時間的流れとしては、12章1節に「**過越祭の六日前に**」とありますが、マタイやマルコでは「**過越祭の二日前**」になっています。その点に違いはあるのですが、7節のイエス様の言葉に「**この人のするままにさせておきなさい。私の埋葬の日のために、それを取っておいたのだ**」とありますので、受難物語に入る直前の話として設定されている点が変わりません。そして、ヨハネ福音書では、11章でラザロがよみがえるお話があるのですが、そのことが契機となって、ユダヤ人たちは、イエス様を殺害しようとします（ヨハネ11：53）。また、本日の箇所のお話になりますが、祭司長たちはラザロをも殺害しようとするのです（ヨハネ12：10）。

さて、本日の使徒書は、フィリピ書です。新しい聖書日課では、大齋節の間、このフィリピ書を順不同に読みますが、本日の箇所は、パウロの自伝的部分があります。本日はその部分から学びたいと思います。なぜならば、回心する前のパウロは、イエス様と出会っていませんが、先に触れたイエス様の殺害に賛成する側であったと思われるからです。

まずフィリピという都市についてですが、フィリピはマケドニアの東部にあり、パウロは、第二回伝道旅行（49-52年：使徒15：36-18：22）の際に訪れ、四九年頃ここに教会を設立しました（使徒16：12以下）。フィリピの教会は、パウロとの関係が深く、彼を物心両面から支え、エパフロディトやクレメンス、エボディア、シンティケ、リディアなどパウロと共に豊かな働きをする人々がいる教会です。この手紙がいつ頃書かれたのか正確にはわかりませんが、恐らく教会が設立されてから数年後ぐらいと思われる。

パウロは教会のことを心配して手紙を書いているのですが、それは本日の箇所の直前3章2節に「**あの犬どもに気をつけなさい。悪い働き手たちに気をつけなさい。形だけ割礼を受けた者に気をつけなさい**」とある通り、フィリピの教会を惑わす人々が登場したからでした。ここで厳しくパウロが批判する対象は、かつてのパウロのような教会の迫害者ではありません。宣教者たちです。恐らくユダヤ教の伝統を守りつつ教会を形成しようとする人々でしょう。またパウロは、「**神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉を頼みとしない私たちこそ真の割礼を受けた者です**」（3節）と述べています。イエス様を通して示された主なる神様の福音が、もはや割礼を受けたものたち、すなわちユダ

ヤ人に限定されないと悟ったパウロは、「肉を頼みとしないこと」こそ真の信仰者であると主張するのです。そして、もし肉を頼みとするのであれば、どれほど自分は優れていたか、それを本日の5節以降で語るのです。そこには「私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義に関しては非の打ちどころのない者でした」(フィリピ3:5-6)とあります。この経歴がどれほどすごいのかは、当時のユダヤ人でしかわからないところもあると思いますが、最後にある律法に関して「非の打ちどころのない者(口語訳では「落ち度のない者」)」であった。それがパウロの最も主張したい点であったと思います。

しかし、ユダヤ教という枠組みの中ですが、それら人間の考えでは有利なことと思われる全てを、パウロは、キリスト・イエスを知ること(知識)の素晴らしさの前に、損失あるいは屑(新共同訳「ちりあくた」、口語訳「ふん土」いずれにしてもかなりひどいものを意味する言葉)と考えるのでした。つまり、マイナスにしか作用しない事柄になると述べるのです。何故ならば、「私(パウロ)には、律法による自分の義ではなく、キリストの真実による義、その真実に基づいて神から与えられる義」があるからです。この箇所は、「キリストの」に関わる部分の訳がかなり変わりました。口語訳では「キリストを信じる信仰による義」、新共同訳では「キリストへの信仰による義」でした。これらはプロテスタント神学の信仰義認が大きく訳に関わっているからだと思いますが、直訳では、「キリストの信仰による義」です。また、「真実」も当初は「信実」という訳語を用いる予定でしたが、様々な議論の末に現在の訳になったようです。わたしは直訳が一番パウロの主旨を示していると思います。なぜならば、パウロは、弱さと苦しみの象徴である十字架の姿の中でも、信仰を貫くイエス様の姿に真理を見出したからです。そして、復活のイエスとの出会いを通して、そのことを確信したからです。

10節以降、パウロは、信仰者として目標が、キリストと同じ復活に達することであると述べます(3:10、11)。そして、信仰者とは、その状態をすでに得たのではなく、得るために歩み続けている存在であると述べます。ここでパウロは、教会と信仰者にとって重要な事柄を示しています。それは、信仰者は「すでに」主なる神様に召されているが、「いまだ」その救いは完成していない、自分たちはその間にいると認識して、歩みつづけることの大切さです。その歩みは、自己の完成を断言する肉の誇りに比べれば、弱く苦しい歩みです。しかし、そうであるからこそ、キリストの十字架に深く結びつくのです。イエス様を十字架にかけて殺害した人々は、その場では、信念や信仰の完成あるいは人間的勝利を確信したかもしれません。回心する前のパウロも明白な律法違反は死罪で当然、そう納得したかもしれません。しかし、そこにすべての人のための救いも平和もなかったのです。しかし、イエス様の十字架の受難と復活は、すべての人の救いと平和へとつながります。すべてを造られた主なる神様の愛が最も明確に示されているからです。まことの救いと平和を目指して、今年もイエス様の復活を祝いたいと思います。そして、そのための準備の大斎節を過ごし続けたいと思います。